四日市空襲を知っていますか？　　6 月 18 日に献花式があります。

私たちが生活している四日市市は、昭和 20 年 6 月 18 日大規模な空襲に見舞われ、その後 8 月 8 日まで計 9 回の空襲により、800 人以上の市民の尊い命が奪われました。四日市市では、その悲劇を後世に伝えようと、毎年 6 月 18 日に、鵜の森公園内の四日市空襲殉難碑前にて献花式を行っています。

78 年前の昭和 16 年(1941)12 月8日、日本は真珠湾を攻撃して、アメリカと戦争を始めます。そして、早くも翌年の 17 年4月 18 日、東京名古屋・大阪などの大都市が空襲を受けます。それは、アメリカ軍の B25 によるものでした。

海軍第二燃料廠をはじめ多くの工場群を擁した四日市は、アメリカ軍の重要攻撃目標とされた。

1945 年(昭和 20 年)6 月 18 日午前 0 時 45 分、アメリカ軍 B-29 戦略爆撃機89 機が焼夷弾11,000 発・567.3トンを投下。約 1 時間の絨毯爆撃で全市の 35%が焼失、市街地は焦土と化しました。6月 18 日の被害は大きく、死者 505 人、重軽傷 503 人、焼けた家は 9,372 戸にものぼり、市民は茫然(ぼうぜん)自失(じしつ)の状態だったそうです。

以後、8 月 8 日まで合計 9 回の空襲を受け、海軍燃料廠をはじめとする工場群は壊滅的被害を受けました。全空襲による人的被害は、被災者 49,198 人、死者 808 人、負傷者 1,733 人、行方不明者 63 人にのぼりました。

旧三瀧橋は、大正13年市内初の鉄構橋で道巾も広く、橋の両端には大きく刻まれた石が積み重ねられ石柱をかたち作っていた。 三瀧橋の近くに住んでいた私は、昭和20年6月18日の四日市大空襲に出合った。6月17日午後 11 時半頃、一亘解除になった警報が空襲警報に変わったとき、町内の警防団に詰めていた父の大きな声が戸口から聞こえた。「今夜は危ない、早く逃げなさい。」と言って出ていった。妹と私はかねて用意の非常袋を持ち、弟2人は各々の自転車に荷物を積んで羽津山の伯母の家に向かった。末弟（小1）妹（小6）と母と私は、前庭の防空壕に入った。まもなく、隣の〇〇さんが、「〇〇〇さん、そんな所に入っていてはいけません。早く逃げなさい。」と、注意してくれた。〇〇さんは名古屋の空襲で焼け出され里帰りをしていた。私は早速弟と妹に2人で逃げるように言い、母と2人で家を守ろうと思った。家の中をうろうろしているうちに、裏の建福寺を隔てて第一小学校の方に火の手が上がった。私は逃げなければと急いだ。いつまでも家に執着している母を促し、母の手を取って家を後にした。家を出て十軒程きた所で焼夷弾の爆撃に出合った。焼夷弾は母と私のすぐ横に落ちた。幸いにも直撃をのがれたので、母の手を強く引っぱって通り抜け三瀧橋へと走った。橋の手前の髪結屋さんの家が燃えていた。私は橋を渡ろうかと迷ったが渡らず堤へと向かった。堤防は人、人、人で肩を触れ合い、押し合うほどで走ることも通り抜けることも出来なかった。四日市の多くの人が三瀧川をたよって集まっていた。B29 の攻撃で照らし出された人々の悲愴な顔を見て、私は焦燥に駆られ母の手をしっかりと握った。人の流れに流されて知人の家の前に来たとき、〇〇さんの母親が乳母車の中に座って両手を合せ念仏を唱えていた。見て見ぬふりをした心残りが今も私の胸底に残っている。何回目かの焼夷弾が三瀧川へ雨のように投下され、シュシュシューと金属音をたてて砂の中に突き刺さる音と同時に上がる人声の異様さに、川の中を這うように川上へと移動していた母と私は抱き合って息をひそめた。B29 の爆音の消え去った東の空を燃やして真紅の太陽が昇ってきた。その時「生きていた」という喜びが一夜の悲しさを吹き飛ばした。太陽に勇気づけられた私は、父や弟妹のことが気になり母を堤に休ませて三瀧橋に向かった。

明治橋に近づくと人の倒れているのが目に入った。明治橋と三瀧橋との間にはより多くの人が倒れていた。息絶えている人、助けを求める人の声、なすことを知らない私は手に汗を握って走った。三瀧橋附近には人が重なるようにして倒れていた。三瀧橋は熱くて渡りづらかったが思い切って渡った。橋の上から見る街は焼け野原で、建福寺の墓地のみが寂寞（じゃくまく）と見えた。河原に降りて橋脚を見ると逃げてこられた人々が大勢集まっていた。私は近づいて妹と弟の名前を祈る思いで何べんも大声で呼んだ。すると、橋の下から真黒の顔をした子供が二人泣きながら私の方に向かってきた。私は駆け出して二人の肩を抱きしめて泣いた。三人は言葉もなく涙と埃でくしゃくしゃであった。 三瀧橋から見るはるかな鈴鹿嶺の峯々は、優美な姿で今も私に語りかけてくれる。三瀧川の流れは、あのいまわしい戦争の犠牲となられた御霊に哀悼の祈りを捧げるかのように晶々と流れている。生まれ変わった三瀧橋は永久の平和を願う橋であるように思った。

出典　三重県戦争資料館 「平和を願う三瀧橋」